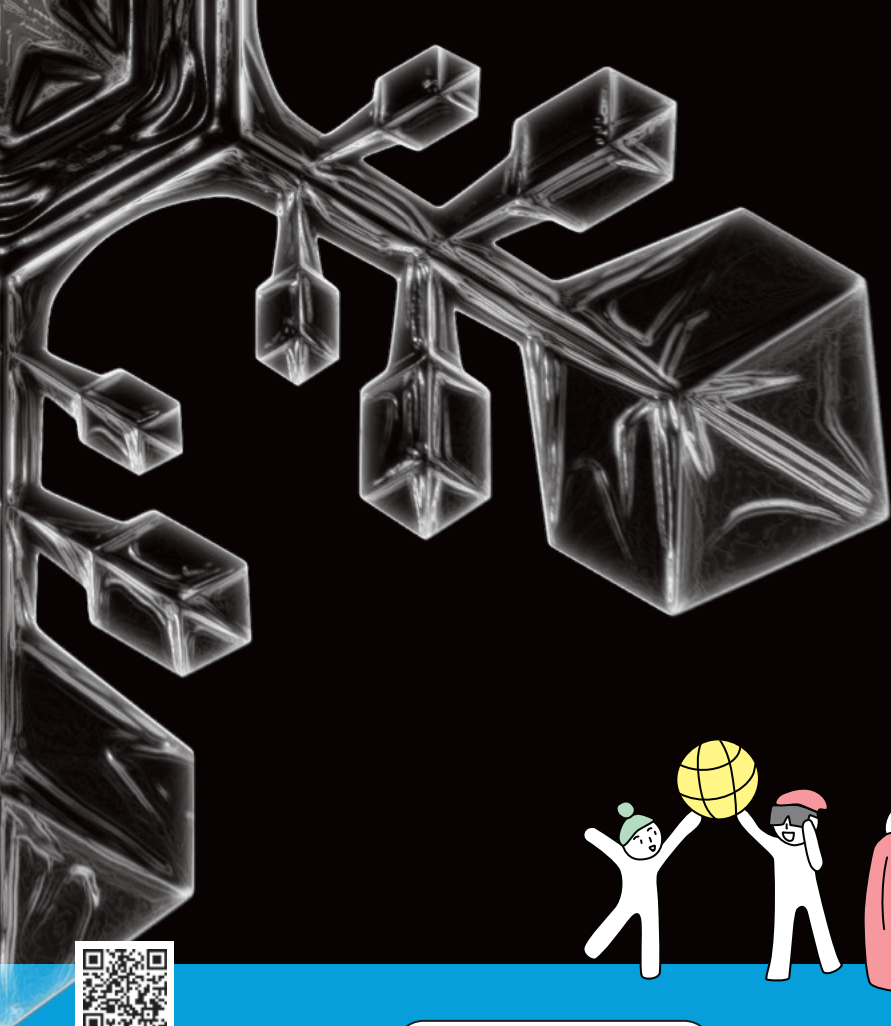


未来の雪の公園



English
Guide

会場ガイドブック

モエレ沼公園

LAST SNOW

札幌国際芸術祭

SIAF2024

SAPPORO INTERNATIONAL
ART FESTIVAL
Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa

ここモエレ沼公園会場では、札幌国際芸術祭(SIAF)2024の未来の冬の実験区のひとつとして「雪×アート×テクノロジー」を合言葉に、新しい冬のスポーツをつくる共創型プロジェクト「未来の札幌の運動会」を実施します。

雪原を舞台に、参加者がアイデアを出し合い、道具やルールを自分たちで作り、運動会を完成させます。2月23日には競技をつくるハッカソンを、24日には200名の参加者を迎えてすべて新作競技による「未来の運動会」を実施します。また、これに先立ちガラスのピラミッドには「未来の運動会ルーム」を開設。「未来の運動会」で生まれた種目を体験できるコーナーに加え、毎週末にはミニワークショップが楽しめます。

さらに会期中には脇田玲による数十億年の大地の変遷のダイナミクスを8Kで表現する映像・音像作品を展示。雪倉庫では、フィンランド出身のユッシ・アンジェスレヴァとスイスのアーティストユニットAATBが、特殊な空間を生かし、ロボットアームによる氷と光のパフォーマンスを披露します。

雪に触れ、遊ぶ。そしてここから先の世界を想像し発見する一冬のモエレ沼公園が新たなアイデアを生み出す未来の雪のフィールドとなります。

モエレ沼公園とは

モエレ沼公園は彫刻家のイサム・ノグチが公園全体をひとつの彫刻作品としてデザインしたアートパーク。公園内には大きな人工の山や噴水、遊具エリア、文化活動の拠点となるガラスのピラミッドなどが点在します。冬には一面の雪景色となり、ウィンタースポーツのメッカに。アーティストがゴミの最終処分場の跡地を「空からみる彫刻」に生まれ変わらせた世界でも類のない施設であり、人間の手が地球に大きな変化を加えているアントロポセンの時代を象徴する場所ともいえるでしょう。



Photo: TAKUMA NERIO

未来の札幌の運動会をつくる

札幌国際芸術祭2024、モエレ沼公園会場では「未来の札幌の運動会」を開催します。運動会発祥の地のひとつといわれている札幌。「未来の札幌の運動会」では、「雪×アート×テクノロジー」を合言葉に、雪という札幌ならではの地域資源を活かしながら、テクノロジーやダンス、音楽など、さまざまな要素を取り入れた未来のスポーツが生まれそうです。

たったひとりで始めた運動会

宮井 未来の運動会はこれまでも各地で開催されていますね。その始まりは？

犬飼 思いついちゃったんです。最初は僕ひとりでやっていた。空から落ちてくるドローンを「危ないー!」って言って下で受け止めたり。飛ばしながら途中で電源を切ったら落ちてくるでしょ。高価なドローンを使ってそんなことして、「ああ、未来の運動会ってこんな感じだろうな」と思ったのが始まりです。もともと僕はゲームクリエイターで、テレビゲームをつくりたりeスポーツのプロデューサーをしたりしていました。テレビゲームをスポーツとして見たり、アートや物語として見たり、いろいろな捉え方をするための「一つのメディアとしての運動会」に可能性を感じて、ここ10年ほど運動会に注力して活動しています。

宮井 最初はおひとりだったのですか! 大きな規模で初めて開催された場所は山口ですか？

犬飼 そうですね。2015年12月、山口情報芸術センター[YCAM]で開催した「未来の山口の運動会」です。ちょうど、東京でのオリンピック開催が決まって、勤どころのいい人たちが「テクノロジー×スポーツ」だとか、現代的なスポーツについて考え始めていた頃だったんだと思います。そんな状況も相まって、選りすぐりの方々が全国から集まりました。東京の大学教授と市民と一緒に騎馬を組むなど、不思議な光景でした。その後西くんを誘って「一般社団法人 運動会協会」を立ち上げ、以後の未来の運動会の活動はそこを母体に行なっています。

*「ハッカソン」とは、ハック Hackとマラソン Marathonを掛け合わせて造られた造語

企画を発案した3人



犬飼 博士
運策家/一般社団法人
運動会協会理事



西 翼
山口情報芸術センター
[YCAM] キュレーター/
運動会協会理事



宮井 和美
モエレ沼公園学芸員/
プロジェクトリーダー

地域や人が競技にあらわれる

西 「未来の山口の運動会」はその後、毎年のように開催する恒例行事になりました。200人ほどが参加する運動会当日と、それに先立って30人ほどの参加者で運動会の競技をつくる開発イベント「運動会ハッカソン*」をセットで開催しています。他の地域でも、札幌でも基本は同じです。ハッカソンではまず、使える道具や仕組みを紹介して、どんなものを使ってどんな競技をしたいか、アイデアをとにかくたくさん出します。そして実際にどンドンやってみる。コンピュータを操作したり体を動かしたり、試行錯誤を繰り返します。僕らがずっと使い続けている「デベロッパレイ」という造語があります。デベロッパ(開発)とプレイ(実践)、どちらも一緒にやるというのが、僕らが未来の運動会で大事にして、面白がっている姿勢です。

宮井 「ハッカソン」というと、エンジニアやプログラマーが参加するイベントというイメージですよね。そうでない人も参加できますか。

西 もちろんです。YCAMには情報機器を扱える人がたくさんいるので、「未来の山口の運動会」ではテクノロジーを活用した競技が多く生まれます。でもそれはあくまで、地域性のひとつです。開催地や参加する人によってつくられる競技は全然違いますし、テクノロジーが介入しない競技もあります。「応援合戦を今風にアップデートしよう」と、ビートに乗せてラップバトル風にした。各地で開催するうちにいろんなバリエーションが見えてきています。

「応援合戦バトル」
Courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM] Photo: 森田 尚



犬飼 大事なのは、僕らが競技を用意するのではなく、参加者がつくること。そうすると、開催地ごとに違う運動会になります。

西 運動会にどんな人が参加するのも重要です。運動会当日の参加者には事前にアンケートをとって、年齢層や男女比、国籍、ハンディキャップの有無などを知った上で、みんなと一緒にできる競技、運動会をつくります。

宮井 さまざまな条件をクリアすることが、運動会にエッセンスを加えることにもなるんですね。札幌では国際芸術祭が舞台。ユニバーサルな運動会にしたいです。ちなみに、運動が苦手な人も参加できるのでしょうか？

犬飼 できます。僕も運動は苦手です(笑)。サッカーよりテレビゲームが好きで、それでずっとeスポーツをやっていたから。

地域や記憶につながる「プレイ」

宮井 私は2022年に行われた「未来の東京の運動会」に参加したのですが、名作競技がありました。渋谷のスクランブル交差点をモチーフにした……

西 「スクランブル交差玉」ですね。

宮井 そうです。参加者みんなが玉入れの玉を頭に載せて、玉を落とさずに運ぶ競技なのですが、4チームに分かれてスクランブル交差点のように参加者が行き交うのです。玉を落とさずに交差点を渡り切って、カゴに玉を多く入れたチームが勝ち。競技の中に街の特徴が凝縮されていました。

犬飼 あの競技には、渋谷の環境下で育まれた通勤のコツのようなものが生かされていますよね。

西 京都で生まれた、「みんな寝てるかー」という、「だるまさんがころんだ」と「玉入れ」を組み合わせたような競技もあります。京都といえば修学旅行。そこからアイデアが広がってきた競技です。先生役が「みんな寝てるかー」と言った途端にみんな寝たふりをして、先生が背中を向けている間に玉入れをする。玉入れは枕投げのイメージですね。みんなが



「スクランブル交差玉」

持っている学生時代の記憶を掘ってくる、秀逸な競技でした。「スクランブル交差玉」もそうですが、ルールや仕組みが、ストーリーや記憶をぐっと引き寄せるような競技が時おり生まれます。

犬飼 そういう競技は競技でありながら、お芝居やパフォーマンスアーツのようでもある。演じるという意味の「プレイ」にもなり得るということです。

真冬の札幌で運動会

宮井 モエレ沼公園にはモエレ山ともうひとつ、プレイマウンテンという山があります。イサム・ノグチの「プレイ」には今おっしゃったような「演じる」という意味や、演奏、スポーツにおける「プレイ」などが含まれます。さまざまな「プレイ」が競技を通してあらわれてほしいですね。

犬飼 イサム・ノグチの公共彫刻であるモエレ沼公園。みんなで作る未来の運動会の舞台としても、とてもふさわしい場所だと思っています。

西 未来の運動会もいろいろなところで開催していますが、基本的にいつも体育館での開催です。今回は屋外なので、これまでの経験が参考になるような、ならないような。そもそもなぜ、真冬の屋外で？

犬飼 正直、正気かと思いましたが(笑)。

宮井 冬の屋外でプロジェクトを実施することのハードさはもちろん承知しているのですが、いろいろ考えるうちに、「未来の運動会しかない」と確信してしまったのです。それに、なんとかなるという自信もあって。というのは、実は2012年までの7年間、「スノースケープモエレ」という冬のモエレ沼公園を舞台にしたアートプロジェクトを実施していました。地域のアーティストたちと一緒に馬車を走らせたり、モエレ山の山頂に雪で山小屋をつくらせたり、無茶もしながらいろいろな企画をしていました。SIAF2024ディレクター小川さんからの「真冬のモエレ沼公園の屋外で企画を」というリクエストを受けて、当時感じていた、自然の厄介さと格闘しながら発揮されるクリエイティビティの魅力が蘇ってきたのです。そうして考えるうちにふと、以前西さんから聞いた未来の運動会を

思い出しました。未来の運動会は、とつきにくいと思われがちなメディアアートや現代アートを扱いながらも、参加者みんながすごく楽しそうですね。モエレ沼公園は美術館ではなく公園で、公園の中心にはやはり体を動かすことや遊びがあります。さらに今回、「未来」というところでも、SIAF2024のテーマとも合致しています。

犬飼 これはもう、必然ですね!

「こうじゃなきゃダメ」はない

西 前例がないとはいえ、未来の運動会にはそもそも「こうじゃなきゃダメ」という決まりはありません。コロナ禍という過酷な状況下でも、オンラインで開催したりしながら続けてこられた。さすがにブリザードの時は中止にせざるを得ないかもしれませんが……。集まった人たちと考えて試していけば、何かをつくれる。環境要素がエッセンスとしてどう作用していくのか、すごく楽しみです。

宮井 エッセンスの具体例を挙げると、冬は日によっては、通勤にいつもの3倍の時間がかかったりもします。

犬飼 3倍も!?

西 そうすると、3倍かかるかもしれないということを利用して競技が設計されるかもしれないですね。

宮井 「到着できなかった」という参加者も出てくるかもしれません。

犬飼 集まらないことを想定するのは初めてのケースです。会場に行くことがすでに競技、ということでもいいんじゃないですか。

宮井 Googleマップにも冬の除雪状況までは反映されないなので、マップ通りに進んでも除雪されていないで大混雑、みたいなこともあります。冬の屋外での実施なので競技中も含めて安全管理は本当にしっかり考えなければいけません。

犬飼 安全管理は本当に大事です。それを考えることこそが札幌らしさであり、運動会らしさでもある。参加者も含めみんなと一緒に考えられるといいですよね。



宮井 芸術祭全体としても、夏開催と冬開催では考えなくてはならない範囲がだいぶ違います。それが意味で、札幌らしい芸術祭を考えることにつながる。「未来の札幌の運動会」は、SIAF2024の象徴的な企画になるのかもしれない。

犬飼 大丈夫! 中止になっても運動会は運動会です。

みんなで未来の札幌を共創する

宮井 万が一、2月23日、24日の運動会本番が荒天だったとしても、「未来の札幌の運動会」が全く楽しめなくなるわけではありません。SIAF2024の会期中、ガラスのピラミッドの中では、未来の運動会を知って楽しむことができる「運動会ルーム」を開設しますし、9月以降には多くのプレイイベントを重ねます。

西 秋以降、9月は未来の運動会のレジェンド競技「綱引き玉入れ」の体験会、10月には人材育成のワークショップ、12月からはツールづくりのワークショップと、毎月イベントを開催して徐々に盛り上げていきます。なぜこんなに長丁場で準備をするかという点、「未来の札幌の運動会」が今回の一度だけで終わってしまったらもったいないと思うからです。プレイイベントを通して札幌の仲間が増えれば、第2回、第3回と継続するかもしれない。そんな願いも込めて、丁寧に時間をかけて準備を進めていきます。

犬飼 「未来の札幌の運動会」の言い出しっぺは宮井さんと、僕や西くんが企画者ではありますが、運動会そのものは、モエレ沼公園にその日集まった人たちの共創によって、初めてつくられるものです。未来の運動会の中心には常に共創、Co-Creationの考え方があります。「未来の札幌の運動会」をつくることは、「未来の札幌」「札幌の運動会」「未来の運動会」をつくることでもある。いろいろな受け取り方をしてほしい、そんな思いがこのネーミングに込められています。札幌のみなさんにはぜひ、運動会が未来の札幌について想像できる場になったらいいと思いますし、そこで未来の札幌を一緒につくっていく仲間が見つかったらいいなと思っています。



映像制作:10 seconds thinking about the future
「未来の札幌」制作:赤坂理恵(2020年)

脇田 玲

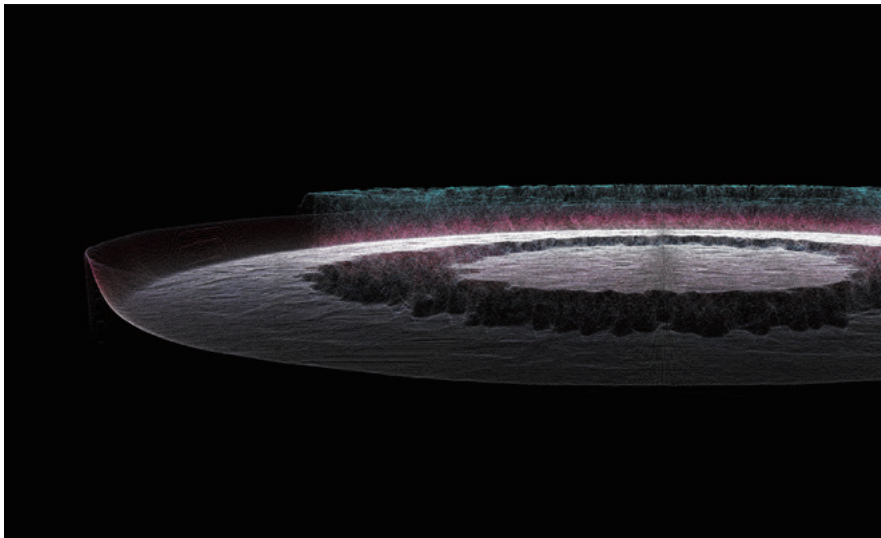


Photo: 脇田 玲 / 機材協力: アストロデザイン株式会社 / 制作協力: 慶應義塾大学 脇田玲研究室

果てなく続く大地の変遷。
そのダイナミクスを8K映像と
音場合成技術により体感する

《Over Billions of Years》2024

「人間が10億年生きることができたら、大地が流体のように振る舞う様子里に立ち会えるのではないだろうか」。悠久の時間の中で展開される大地の脈動や呼吸を聞き、大地のその新陳代謝に立ち合いたい。本作はそんな思いに端を発しています。脇田玲は氷河期、間氷期、大地の砂漠化、森林化、河川の生成、島の生成、人工物の生成など、数千年から億年単位で推移するさまざまな段階を、1つの数理モデルを用いてシミュレーションし、高精細な映像表現と音場表現で可視聴化します。大地はどのように生まれ、変化していくのか。文明が生まれて衰退していく過程はどのようなものか。自然と人工はどのように接続されるのか。8K映像と音場合成技術による新たな音響表現がもたらす空間のなかに、根源的な問いが浮かび上がります。

脇田 玲
WAKITA Akira

アーティスト、サイエンティスト。40歳を目前に受けた癌の告知をきっかけに、アートの領域での活動を本格的に始める。流体力学や熱力学に基づいた独自のソフトウェアを開発し、科学と美術を横断する映像表現に昇華。その作品は目の前にありながらも知覚できない力を可視化／可聴化／物質化し、世界の見方を更新する。アルスエレクトロニカフェスティバルほか、国内外のさまざまなフェスティバル、芸術祭で作品を展示。慶應義塾大学環境情報学部教授。

技術協力: NHK放送技術研究所

NHK放送技術研究所は、日本唯一の放送技術分野を専門とする研究機関。豊かな放送文化を築くために、研究開発の立場から貢献するという役割を担っている。放送技術分野の基礎から応用まで幅広い研究に取り組んでおり、これまで、衛星放送やハイビジョン、8Kなど新しい放送メディアの創造をリードし、番組制作技術の高度化にも貢献してきた。近年は将来のメディアに向けた新たな音響表現の探索なども進めており、その代表的な研究であるラインアレイスピーカーを用いた音場合成技術を展示する。

ユッシ・アンジェスレヴァ+ AATB



Photo: Gianni CAMPOROTA, ECAL - A Third Hand
助成および制作協力: プロ・ヘルヴェティア文化財団 / ローザヌ州立美術学校 "A Third Hand - Creative Applications for Robotics" / スイス連邦工科大学ローザヌ校 Geometric Computing Laboratory, Rayform SA

swiss arts council
prohelvetia

氷が解けるのが速いか、
手を加えるのが速いか

《Pinnannousu》2024

モエレ沼公園ガラスのピラミッドの冷房システムに使われる雪貯蔵庫で展開される本作は、アーティストが実際に会場で制作するパートと、そのアーカイブ映像を上映する2つのパートに期間を分けて上演されます。会場にはロボットアームによって加工される氷塊、すでに加工され解けつつある氷、そしてその氷が時間をかけて解ける様子を低速度で撮影した映像が投影されるスクリーンという3つの要素が配置されます。ロボットアームで加工される氷塊は徐々にレンズとして形成され、アームに取り付けられた懐中電灯から発せられる光を屈折させ、壁面に3D映像として投影されます。ゆっくりと解けていく氷塊を計算されたレンズの形に加工するという行為は、明確な形のないものに形を与えようとする実演的な試みであり、止まることを知らない地球規模の課題に対処しようとする人間の試みを彷彿とさせます。

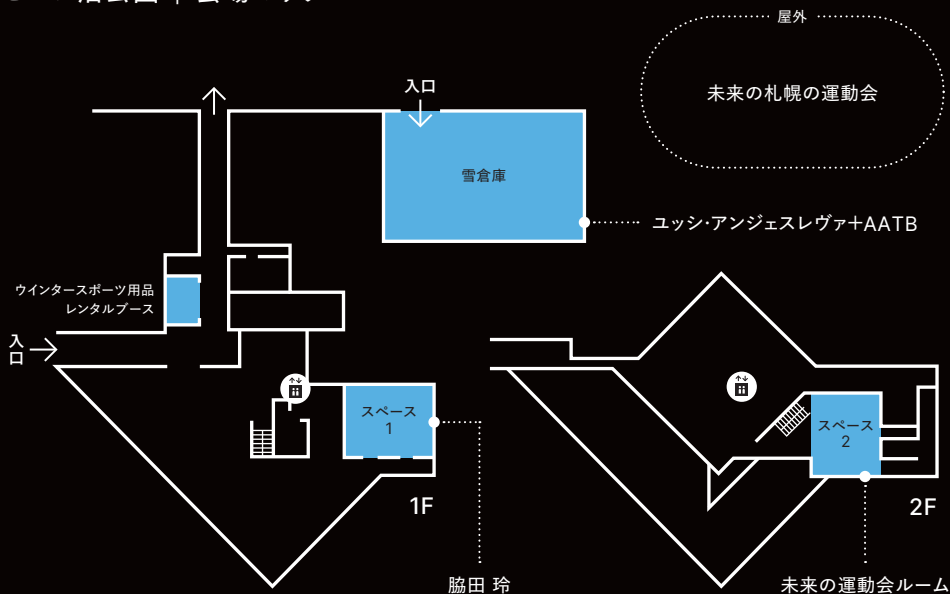
ユッシ・アンジェスレヴァ
Jussi ÄNGESLEVÄ

科学的精密さと簡潔さを探究するメディア・アーティスト。ベルリンを拠点とするART+COM Studiosのクリエイティブ・ディレクターとして、動的なアート作品、コンピュータによるデザイン、インタラクティブな空間を生みだしてきた。これまでにベルリン芸術大学でニューメディアのコースを率い、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートでは客員教授を務める。学術・産業分野、また個人のアーティストとして活動するなかで、テクノロジーに対する深い理解、社会的影響の考察、具現化された美的エレガンスを兼ね備えた作品を目指す。現在はサンフランシスコ・ベイエリアを拠点とする。

AATB

スイス出身のアンドレア・アナーとフランス出身のティボー・プレヴェによるユニット。スイスのローザヌ州立美術学校出身の両名は、インタラクティブなオブジェやインスタレーションを作成していたが、3年前に産業用のロボットアームに出会う。以降、ロボット工学や工場自動化がもたらす可能性を日常の中に見出すことを目指し、プログラミング、電子機器や機械に関連する技術、精密加工を密接につなぐ活動を行っている。

モエレ沼公園 | 会場マップ



スケジュール

スケジュール	会場	2024年 1月	2月
脇田 玲	スペース1	展示 ●————— 1月20日(土)～2月25日(日) —————●	
ユッシン・アンジェスレヴァ +AATB	雪倉庫	公開制作 ●— 1月20日(土)・21日(日)	
		展示 ●— 1月27日(土)・28日(日)	
		記録展示 2月3日(土)・4日(日) ●— ●— 2月10日(土)～12日(月・祝)	
未来の運動会ルーム	スペース2	展示 ●————— 1月20日(土)～2月25日(日) —————●	
未来の札幌の運動会 (要事前申込)	屋外・室内	ハッカソン* 2月23日(金・祝)・24日(土) ●—	
		本番* 2月24日(土) ●	

*荒天の場合翌日順延

未来の雪の公園

会 場 モエレ沼公園 (札幌市東区モエレ沼公園1-1)

会 期 2024年1月20日(土)～2月25日(日)

開館時間 10:00～17:00

休 館 日 毎週月曜日 (2月12日は開館し、13日休館)

主催：札幌国際芸術祭実行委員会、札幌市 共催：公益財団法人札幌市公園緑化協会



モエレ沼公園
ウェブサイト

札幌国際芸術祭実行委員会事務局

〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目札幌時計台ビル10階 TEL: 011-211-2314 | E-mail: info@siaf.jp

✕ @SIAF_info | ① @siaf2014info | ② @siaf_info | ③ 札幌国際芸術祭/SIAF | https://2024.siaf.jp



SIAF2024
公式ウェブサイト

